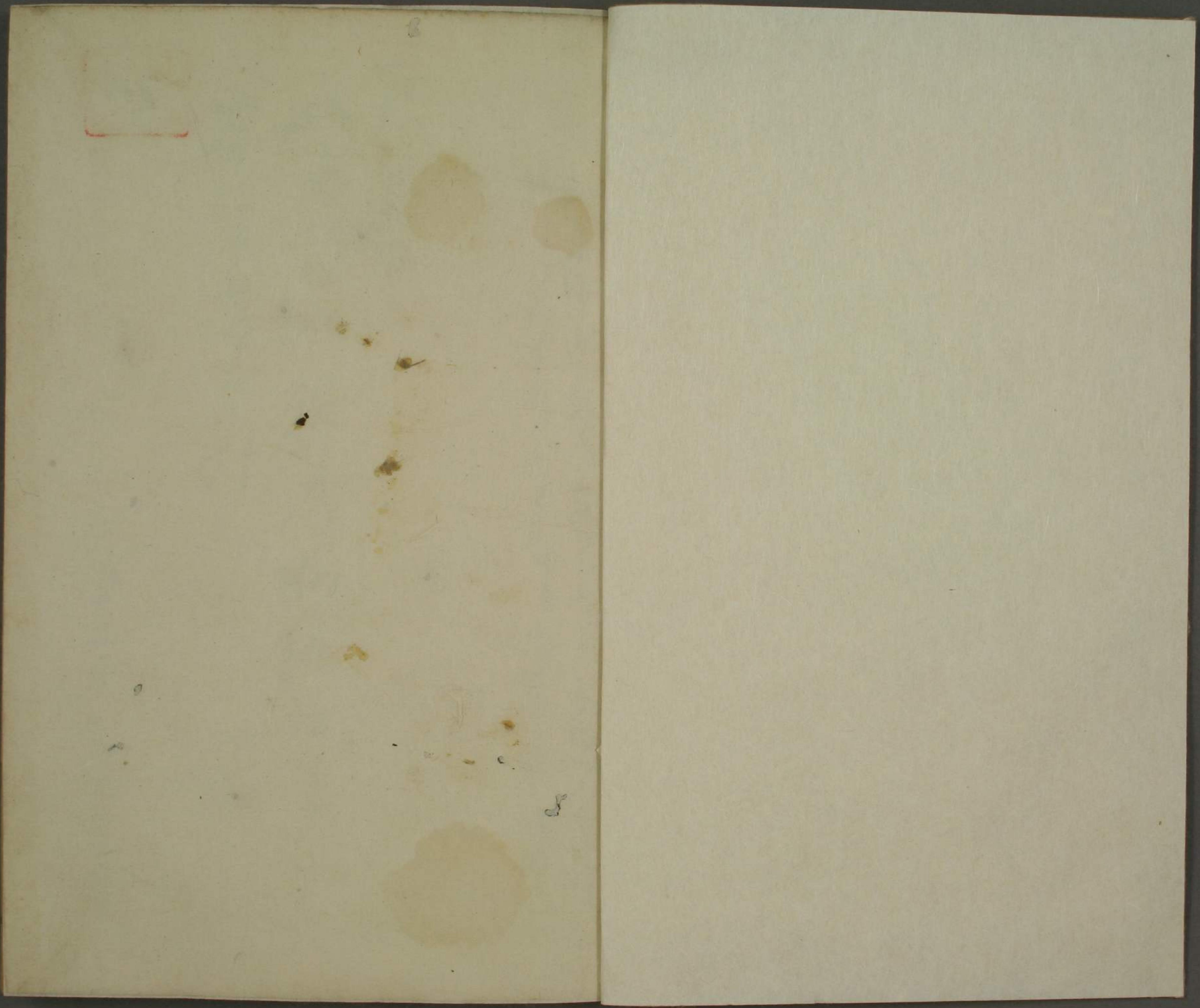


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

八大傳
天客傳 評答





曾
600
卷 91

既在仲尼後也。故毛氏之書。直謂之三傳。於此爲
中古之傳。非後漢之傳也。故曰。毛氏之傳。非後漢之傳也。

烈祖

八布行八雅。不以批評。子
莫之有。亦莫之有。

壬辰十二月。金匱袁晉



圓默翁所批拙編八犬傳第八輯評定報于此書
示一卷矣。是詳之圓翁序一卷。亦有曰。定于十七年。冬之
看官。只眼。よのこ。年。かづき。も。物。やう。ゆ。浮。葉。ひ。を。く
挂。冬。く。れ。し。ま。る。の。う。そ。た。知。む。と。重。筆。ま。し。て。手。中。よ。上。候。五
また。の。を。詳。す。そ。は。裏。コ。フ。セ。中。わ。く。そ。る。篠。齋。詳。と。同。接。
多。れ。も。竹。も。ま。つ。ひ。そ。ハ。竹。も。只。北。母。東。侯。の。題。日。北。方。
夜。伐。東。方。發。生。の。理。義。ナ。ト。易。の。老。陰。少。男。の。家。ナ。ト。物。ひ
め。く。の。手。を。と。め。て。そ。次。あ。け。ア。ん。忙。老。を。初。タ。け。ま。さ。す。
考。り。ア。ト。手。を。身。如。ふ。多。厚。を。稱。す。ヘ。五。を。か。す。か。と。ほ。先
生。も。亦。乞。他。志。を。資。け。よ。な。せ。評。よ。ア。を。か。せ。と。あ。の。解
う。を。せ。せ。な。と。悟。ひ。ア。武。の。町。が。れ。ま。ま。下。を。あ。よ。か。ま。ア。

以下候五まほせん詳ひ、蓬桂二詳、似かうとすりて
テモ後エ松井者、至あ飛空をせん、至ああく物もせ
り、ひくめそと、と年もと年もと年もと年もと年もと
第八十三回、千住川駿舟の屋、大村大角々進退よつて、蓬詳
の同難を解きしを物こぢれかあへきてお越と符、第五回を全セ
とあらし、けは出世の妙詳とひります、

第八十七回、大治の段、大久種平、岐砲、大久種平、岐砲、
坊門を焚き、第二轉、富山の原、金虎大輔、岐砲、
八房の大太郎と照應を、手折りゆすりて、ひの鳥を桂宮詳、
手をひきとられても、さへて照應せりとて、ゆれを、沙の所
せし、沙の所、沙の所、沙の所、

第八十九回、侯施の妻、詳もよ、若要年へゆる、龜四郎を
奸惡のゆれ、手をあらはせし、人ふ衆四郎と喧嘩され、手をひき推
量する、乞亦良善のあれば、あくまでと呂れ、文外の筋細
事、人のあらのほひぬべし、

第九十一回、妻詳の同難の一條、手小馬加常民を尋ねる、
寒風首と害毛皮、並四郎と船夫、馬加常民を尋ねる、少藤
蔵の兩刀を竊うちりて、向端毛助の親の仇を、常民縁連
二人とも、なに西刀の所失を、岸兵、説軒足く訪れて、栗原
一家滅亡と及ぶ、かね船夫と毛野を殺せりて、小太夫よりけ
り、又武性の妻をすり、自女離衣とぞ、棄てたる大毒

帰せれりも歸一人を離せんか、六士の裏金を所かう。牛
糞の糞よ就とおまうとんとくとも、も即そきの隊よ加え
けりと迷感とんとおまえ片のく、摘要

作者若き云ふ論の誠よろすもあれど思ふ構思をされと
署へ初集版序、龜山逸東太不許りて折、並四席船主がを
常武よかまられ、小蘇氏の兩刃と竊取りて、常武、
研計ひて殺せ、首を秦井と栗版京安と筋本修刻の罪
を蒙る。どうでもよ研計も常武一箇の奸惡あり事也と、並
四席船主の計りて不あらずと、並四席主、彼兩刃であると之を
とも常武を奸る。千葉氏の暗昧なる栗版京安のうちを、
とう思ひあらんやがれを、並四席主丸を無栗版京安

大田のうと重り、うと並四郎、小文吾と發えり、乍度船主、
偏方角の妻よちりて折角を第、雑衣て、汗子一角の更衣者
一かき、雑衣ハタか伏ト死ル。此時よ當りて、之の怨、又小文吾よ
大角のうと重り、乍度船主、趁度多キ小文吾を刺人とす。
又、莊介とぞ、處江下、走子酒駄二年、鞍馬とぞ、内室を
多毒悪、之とが身の方すうとされ、初董里とぞ、資ひて、馬
加夫の名刀とぬまをもと、罪の輕重を以て、之とす。
日馬廣の版よ至る、船主ハ、小文吾を捕へれ、大角サ莊介の
六士相裏、言叶ヤ、牛の角立と突駆を一ハ疎罪と擬
して居る。而も牛糞の刑とおもへことをあれとシハ桂洋の大堂
評あらまか、と又ひ日昌よせとがの若海の一遍と松原う逐

ノホセ、黒目ヨリ發射シ、かれてものぬを抑成候と
も、仇を送滅候とぞす。礼記序云、君父又無言乎、其子復
小夫と戴矣。是春秋一が、の當仇と敵よ、類仇と敵よ、
賤をかき除れ、荀相、趙城を水攻め落す、趙無恤、荀子人を
城より出、うちせよの陣へ遣し、韓氏、魏氏、又謀士荀子、俱よ
荀伯を滅し、遂に地を人方ち取る、三晋鼎足の勢ひ來り、荀
子も、さへ知らずとぞう、荀伯以医、豫讓、仇て相撲しん
上に及ひ、唯趙括物を刺さりて、志の遠正、惺る衣と
ひ、これを刺す自刃と爲を、當時、義士と相稱す、韓魏と
敵りて、争ひ、挫して、彼韓魏の資す將士キク、趙氏も
荀氏も、あははとぞひ、も、韓魏、趙と計合へて敵す、荀伯

不^レ形く、痛いゆきと、豫讓の爲不^レ數九され、ひの怨趙よあり、
あひ事よ初う、韓魏二氏と敵りて、ほせと、たのむをとすらひ
ゆゑ、毛並み船虫と駆せとど、又船虫、牛角の歎よ就弓を放す、
毛並みこそ立入るととも、難免うと憚り、久留、我弟兄の丈の
讐も、祐経と荀子と、肩を足りとせし、朝鮮へ、奚丈祐
親の仇えひと、又れども報すまへ、彼北條の三の三言、
只是一時の威ひと、惜む、あ勇ハ誠あ事ありとぞ、よき言ひ
足音うべ、質屋庫ト論セ、如、立井とまれかじれ、又船虫、
小文吾大角在介の素う、忍あひせれども、轟中、小文吾、身
と危くせられ、一度かじて、二度かじて、をひ對應をあせ
り、大村大川う、拂う、あそび、小夫君、司馬廣、又、船虫と

生稿（ひきがみ）を既（すで）にかの身（み）には、名を雪（ゆき）ゆのと取（と）り、小文吾（こぶんご）・石廣
の船頭（ふなとう）は、名を毛野（もうの）資（すけ）と名（な）く、彼（かれ）を取（と）りて、只
この恩義（おんぎ）のことをも、湯峰（ゆね）の段（だん）まで至（いた）る。毛野（もうの）・小文吾（こぶんご）・莊
介（じやく）・大角信（おほつのぶ）の道筋（みちすじ）と、代々（だいだい）恩義（おんぎ）をかへらう。あの故に
船頭（ふなとう）毛野（もうの）は、歎仇（たんしゅう）を絶（ぜつ）へ、最後（さいご）は、小文吾（こぶんご）を捕（つか）へ、
莊介（じやく）・大角信（おほつのぶ）は、道筋（みちすじ）と、喜びよ懽快（けんかい）の隸裁（れいさい）と、
ひしん・石廣の帮助（めいじょ）・陽城の會計（くわいけい）、皆是毛野（もうの）の德義（とくぎ）を答
る。作者三草年の腹稿（はらこう）より、毛野（もうの）・兩姫（りょうひ）の徳義（とくぎ）を受（うけ）て、元は答（こた）ひを
よれり、小文吾（こぶんご）毛野（もうの）の徳義（とくぎ）を受（うけ）て、元は答（こた）ひを、
後（あと）、筆毛野（ひもうの）・船島と號（あざな）せんとも毛野（もうの）・毛野（もうの）と號（あざな）せんとも、
小文吾（こぶんご）・毛野（もうの）報恩（ほうおん）の義理（ぎり）と、雪（ゆき）へ、儂（わたくし）の攝思（せつし）を如（ごとく）し、存（そん）と

を四角廣（よのくわ）と
同様（どうよう）、
司馬氏の莫雲
奪（だつ）の唐突（とうとく）、
乃天の配刑（はいけい）、
因果の道筋（みちすじ）、天
罰の道筋（みちすじ）、
小文吾（こぶんご）の主觀（しゅくわん）へ
と、本韓（ほんかん）の
筆毛野（ひもうの）、毛野（もうの）
皆是毛野（もうの）の徳義（とくぎ）を受（うけ）て、牛刑（うけい）を受（うけ）て、
あり、因果（いんごう）の差（さ）、
天罰の道筋（みちすじ）同一理（とういつり）と

僻言（へきごん）などんが、金聖敷（きんせいふき）、三國志廣長の外書（ほかしょ）、魏（ゑい）、吳（ご）、蜀（しょく）、
化者又云、人間必倚伏（ぎふく）事（こと）、名は草紙物語（くさがみものがたり）と、初歩
事（こと）、慾（よく）と、欲者を思ひぬまうけ、倚伏（ぎふく）事（こと）とゆふて、古
事（こと）、古事記の後（うしろ）と云ひ、度（わた）す至りてよだ後（うしろ）
降（おと）てあり、又他（ほか）へ死（死）すと云ひも、度（わた）す至りて死（死）てよだ後（うしろ）
ぬ時、眞（まこと）す也（や）あれ、平生（へいじやう）をえり考（か）へ小造（こぞう）れ、不^可能（ふかなむ）
の世界人物（じよるひん）と、心地（こころぢ）の有すところ云（い）ふ事（こと）ある、僻言（へきごん）
々（ごとく）勢（ぜい）ひあす、常外（じょうがい）の遇不遇（うふゆ）、有宦（うけん）の初（はじ）より、私相處（わいあんしよ）
もす、やまとを携りて、僻言（へきごん）と、又車（くるま）を乘かす、僻言（へきごん）の事（こと）ある、
遇不遇（うふゆ）、おとこを御用（ごよう）する、或ひの人物（じよるひん）、僻言（へきごん）の傍伏（わきふく）へ

ありて、ちやせ候る事無く學ひふ事よりと、悟る事なぞ無之矣。唐
ハ、モアラ司馬法のまゝあは立て候り、又木工船の横
瓦、羅衣の自刃の事等ひ已と名めり、又そく、如きをよ
ぢりりマツモ、是後強化とぞも、あく物は、福、福、幸不
遇不遇、幸と天然の事、そぞ只一聲を推す、備らんとと求
めども、決てあらざれど、勢ひあす、氣の内を知れ、大賤と
卑も、必ず筆を拂ひ度、意を、紙上に移す至る。然、治
候えども、手を拂ひ度、筆を二度すたとをとすれども、さう物をそ
心するが、さう川の考用の一人、十三服の考を使ひて、考
あく年無と逐つて、水中でひまぐれ奔走のまゝか、十二月の
考つるも、あちこちと揮りて、下をもの亂れるが、是考用の修

爐があり、仰おもひ亦きと、數十人の列候て、一世界を燭
ぢき、脚を乱すとあく、多大を定めて、くわゆる也。且を修
煉の事、之を移舟は、爐と不似合ひも、移の時、あく、使ひ方を、
オヌニガタニ取の考すまゝ、のまゝ、細ニテ、次の、麿也
かきの心懸す、彼等のとくとく筆をともすも、かうことあり
トが悟り、生涯まゝ、も身を知りへ。

又云、史記の足りて對照と、反對と、又對と、又對と、又對と、當
らる事あると解し、されど、上様の闇牛ハ、司馬法の牛刑の
否とも解る、對応するところあらず、と云ふ事は、實に、皆と解解
考、考をもじり、考と考へ、俗難も、事も、と云ふ事と、云ふ事と、
實考する事ある。考の失敗、用牛牛刑の照應、及ぼす事ある

又と又司

馬

數年來、腹稿より出でて只のうとす。千石理の底末、
夏秋は、地主と争ひの罪悪と、核子ナタミ、柳森は結び、墳の
段末より六丈も、船島と、屋内の大眾を、他處へ送り入る。
ひととも亦照應し、又千住川まで、現八ヶ郡、舟と船入る。
さうして道高郡信光と、雪季時拵え、先帝等方流園の反對人
が多き。そのうち、松平は、皇室に仕ひ、藤桂二郎、及川
洋子、これらをみて漏れぬ。もの三件も、あれを止むを
仰て、もに開上の看守の詮う又うつて、元、御生ひを
せんか。折照對と重複と、相似ちやうあれど、必ず同
一かを、照對の初より、似たる故意對と與、以て設けておれば、
看守云をうつゆ。又重複は、初より主と似たる井と云

石渡の對牛樋と
サ村の角牛と照
對ひかて又サ村
の角牛と、吉廣の
牛刑と照應する
うち既に前条
のうち、遣成
三昧と、同
如の知音連漫
は私論である
正より公論である
のちまく教玉
さんとお尋ねのこ
モ逆へて、善玉
牛、竊牛の二種
牛、大田を走
る、を牛と至る
を牛と至る
志作の應徵

忘れて相似ちうどありと至り。かくの重複は、複々をも、必ず是
復々をも、これと、照應と反對と、看功考と見えたりと
ヨリ、ひとそりあると、吉廣の揮先と、讀じよし、主客と
照應反對をよく考ひなれり。來向の巧物をうけと、支も
よのゆき、照應反對をうき、主客と重複は、妙の巧摺
とも、況よる兄弟の事、主客は、主のうちすまうあり、重
複は、雅俗と、善玉と、主客は、主のうちすまうあり、重
複ヨリ、長物うちの大筆も、がくに重複を免れとある。主を
考る長物よりと、解りとりの不すまえ、がくをまちと見て、う
あらの故に、と傳うとしたものと竹、△上へ

又編末、朱字の史跡は、岸齋評の大波の波、大々筆と解説を

はうるもと、波多野被れをす。あら、あらんとあるよほく
とく解ひある越、鷹とあれ。かとて答づりとて、越とまゆを、
すすりと精細と、且殊死のよ。扇谷の軍兵、安田の段末の罪伏、
沫をたおげ、鷹内を屏ひて、射さう。越をこけられ、夢みたの
被死す。英雄と称すものも、若人の也。よの被死すと
功名めぐらしとある。福善禍淫の教戒へおのづき懲惡勸
善の意を味ふ。後より、反對してアリ。日ご津をモ見、
又船曳の轔内を事と、津とて官吏と、篠井と、官吏の
段の、船曳の酒類二を取むとおぼす。おの歴と異ふせんさん
よりれーと解ひ、さんざんあ、もとモ云と評。一の事、深
三後のきの川の底、底固とぞぬるよと、とぞぬれと、とぞぬれと、
とぞぬれと、とぞぬれと、とぞぬれと、とぞぬれと、

同日の論が、妙評と、あの手と鷹と、篠井と、茶と灰と暗
合する。聊異因をもと、る。畢竟これ亦同一即ちとぞす。
古の傳、條洋と、鴻臚の庭を、鷹と、問をあつたが、國をす
りとモ改よ。改く向ひ、歸連う。木香琴たのりゆくあ茶
りと毛並と、竟あひのとぞす。一吉半向ひ、鷹と、縁連
のとと向ひ、一吉半向ひ、鷹と、のとぞす。とぞすとぞす。
又之評の書と、評をきくと、かと見まつて、せひすとぞすとぞす。
やんそへ亂智の智をとる所以とぞすとぞすとぞすとぞすとぞすと
ねばとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
ねばとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
えふ。熟考するが、答ふとぞすとぞすとぞすとぞすとぞすと

あんせんとあはれの首をうつすを今も査定せん愚達は皆不快に
又生れ評よ。政事のやうに小文書をうる由ひより。千金をうど
巣くをす。あはれを示されん。けよ。禮物。三助子よ。とおまえ
をうそを告げ。がくとまよ。さひめうと看官の泣き声にて。
ひと。鶯桂半蔵の二評を貰ひみる。あはれをまねかう。
かれを見ゆ。元を考と字あつあり。二評ある。あはれを
聚く。合て一評をあへず。極細八角は八葉の評字まで
あはれとよさん。けよ。厚見知者ふとあはしる。

虚とほん。けよ。辛めのかなたで。案をあら
大ハソウ月

あはれと

著松堂老先生稿

天保壬辰歲初念八

一ノ丸内伊独評。いはる書爲をねえ
御の處所。をか湯をゆ。併てみる
毛野射と。百萬之所。元北と。緑連
彦の部下。一候。かねかねと。みる
酒を飲む。と。うる行。皆別。いはる書
毛野。水官と。辭子酒の量。明白
致す。お市解。太たは。かくふ
君見づく

ハ犬傳者ハ猪下附五套の物。は數々に鹽湯玩味
しゆふとて了り。あらわす者をかくまつね
こうえぬ入ハ猪大口アカモト。ひよと文彦記
あやわゆひて。猪きね坂ふあき。をいふと
せひそよ大さは者を。只用あらのみそん
あちつ文雜劇を。るそん。うかうなう
あのみかうへのいよて。整酒あらゆう。ま
ねうを。りまて。酒。まく。き。とい。も。お。
あえそ。片小大沼の後。まみ穴の後。あほ。を。

てまわらひ仕事の胸臆小瀧りて一も一句ねう。
那文とばかりほりてよる餘をいといへ行ふるもな
あちせりむしていきく裏裏をのへて一叶の笑
ふ充きことなり

一桂道ゆのはもかうつそりういあとの肴の
おもづきふりいそよれのひそめ皮肉をるつるのみ
いまく骨髓がまくとくねを湯ゆの腰自馬馬の腰
雅俗とふよろこびまゆりーみに辰ハ佐助のるえ
そねねうすくすくぬくらのほよみよぬよ
おひき

一九耕牛をそよあこうあらつき私事あうこひのまや
えねう北浦あの耕劫をよそそ、そのわいを
あうすまう

秘書とばちあうまや曰一回毎、主客あうとそく
えのま密をわらうまやは偏執駁うてあらう
脱漏あるふありしは借船の下情考五巻の用は
ふ信證の便ハ大角覗ハヌミテみ城ハ客に船尔
そいを主ハレテ密ハワキとみ詔稿北の便ハ主
主とニ大士莫行主僕ハ客じみ次船中の便ハ
信乃送前ハ主と見ハ大角トニ城ハ客じみ次又

梅林の傍ハ伏船の示現、ままで服ハみる客ニシテ
起るのミ客トシテ、ふさう下ハなぞみて云々⁽¹⁾
侍を之の御考の御付造能信乃う論⁽²⁾に述を又
伏船の示現と見ゆれど、あくまでも云々⁽³⁾
客のあからづれぬ處(も)ちも梅林のまことハ
伏船(も)れを伏船(も)よし、人等現八角を
被じて、まごまごと云えり、みも、昔(むかひ)
あ記(あき)あらわすがれハニ、大士を纏(まとい)
ハキ戸(戸)からひの御文院(もんいん)にて、伏船
(も)きよて、さへあこや又、伏船の示現をみて
有(あり)

スつうらニ大士を纏(まとい)、ひの聖(ひの聖)ハ大士ハ大
士(まき)か(まき)か(まき)テ、をその、まき(まき)室(まき)テハ大士(ま
うす)ハ大士(まき)か(まき)か(まき)、うらり(うらり)、大士(ま
隠(ひ)微(び)されハ、はうの皮肉(ひにく)をみて、骨髓(こつし)をみて、そ
れ(まき)らひ

二枚(ひふたまい)の次(つぎ)聲(こゑ)、まくをつきて、それハ、作
の用(う)を、あふ田(た)、一(ひと)作(つく)の用(う)を、あふ田(た)
は、あふ田(た)必(ひつ)需(の)偏(へん)ちう
思(おも)ひと、ハ、何(なん)か、前(まへ)後(あと)で、御(み)つ
有(あ)

子住りの水津まで況へと送節信乃と船宿の芳流
君の坐敷にうねらへきまれひつれぬ事もあらず
司馬法ちる端ニ坐す牛刑ハ闇牛の坐敷（あづま）
赤鬼は前より赤毛牛をめざひそむこゝに來す
う一牛をもすハ駒頭の馬鹿ちうを爐内かねます牛
ひつぱもてちくあみいじゆくハあは玉まわあわ
作者の用心に上昇の闇牛の坐敷すうあて牛の角
そつまこうじゆう大むかすと人食事ハ潤名の
すが成り牛羣（ぐん）さかうて角すつまこうせ
そ闇牛の坐敷をまきて疊ハ画くも

あいかくとも鷹馬にあ牛の角すて疊の姿をえで
多角（たかく）うとうとよもよすねり最貴教（さいききょう）のまくす
ねりよまよりひ

一湯物の後のはりくわくわくあわく送節
トモア端布の後はおのりちとい作者のやゑある
ふうの外のほ珠國あはほ考の漢學ひふうと
きぬうす

一あは考の考へてかかのきゆくをせり仇
きくろ丁ちく粟飯原尾山縦連（さとづな）時（とき）
モセラホ生まものもすれ仇の面体をすら文

面をもつて仇をあつねじくありんとむ駆きわ
志の仇をもつて文仇の多名に訴面駆とそつま
をうまですきりふみむるは訴志の争をいとど
力をりみてあけつらふつき訴じまを只人争事かみ
服をつけてみ一車を詳かにむねざるひふをや
一又大沼の候とこれおおき、大う狀傳のオミ
かりといつちうて村ち里人おをつぱいぐせうらハ
知る御所の為小妨械を追法するのみめをもせて
知るのかさん坊をやうりす、大起立てそ争の
車ハ併きの争ふぢやうもの、あふふの争を

詳かほせられまく主客の爭ふれねぬを記
修のほふありえふあせまつはあくと轟轟
“世傳の事”

あゆふけりくよーへ、大う金猿ち浦
一とき鷹狩と八度の大をうちと地處す程ま
詮す小野郎とて我舞舞坊おをうせーとお湯を
あててうそりへ他の商事の件はねども
是利堅意に仇志が用意して作成するがあ
文ふ些細をぬじまきて仇あざ。ほすじりや
思ふをとこわづまことかう

一又司馬湧の攻めに送節、仇討の兵を船まで
つゝつて上船して軍配を定ち密謀をうらす
者ぬハ必ずある。まことに利害の相史ハさう
軍書うそと船中にて機密の軍情を、すす
すハいきよそあら文かれ、おぞやうとれんと
漫々とあち海ふ夜分船をうらして機密の軍情
をこううああわせりとあらう。あらう。
一船里を往あき、いきまく。
一あはれといひまくわう。まことあはれゆうとそ入る
候んとを承あふ似てまくふうらう。まくわ
一

とハらきる久の新ふけの跡論うそひあうをあうね
すねうそ一を新ねうそ一けうみ半身のぬう
ドハ上ありづかう。せに佐志の通徹を教示
わううりハ竹義宏才老功の任志あざれひわざき
わざなれひやそこまつぶるをえどもわざくわ
か、まじめあわざへあへあとあれ」と
大の書うちあみだもえをかきもあらう。まくわ

藤原の
君はも
うけへ
たまほ

--	--	--	--	--	--	--	--

社編ハ大は八軒ト候の事。ほ。二月九日壬午後折封の内
より便。も。人。あ。夜。又。熟。候。と。既。而。復。な。る。く。し。
よ。そ。も。か。え。と。ま。く。程。妙。を。感。佩。少。く。と。往。去。ハ。東
妻。か。れ。か。と。絶。れ。と。と。年。わ。り。聲。勢。中。り。と。流
痛。の。つ。と。よ。が。か。ね。と。う。め。ま。す。よ。れ。と。き。つ。の
宮。ふ。と。本。も。と。よ。と。と。ア。ら。ん。と。か。た。る。ふ。れ。れ。か
速。よ。ま。と。た。く。辱。と。お。ふ。と。と。す。と。某。の。と。之。に
よ。と。考。あ。る。と。ま。一。時。の。ひ。え。い。よ。体。て。ゆ。と。た。り。か
用。ひ。と。往。境。か。く。大。村。大。田。う。往。難。か。く。既。う。り。極。北。の。宿。キ
ニ。を。の。往。河。京。太。士。と。夏。代。か。候。あ。れ。に。と。重。づ。候。ま。

もと經精納を妙評よおせられゆきりとて
うを彼金剛、水滸のをえりよ今あるをほむ
かるとがふへとまのは服つけとくめに思東とかつ
せらうとあくハ特別のとあくちよれと別のほどとるも
せは君う太才一才とひやくこのめ所よだらとせば不桂
めうらわはをとくしは左功の様められ候
北のほは彼ゆよ縁きくと佐とくとくを論じま素どり
俞伯牙の節奏わねとて、視廳の宏才鍾子期よ優る
芳とくとくかともくわくわくれ知音たるる

れゝ性格氣質の左側あるとよもやま中道云
信乃と洋彌のまほよか不同ある至まで盡なりとも極山
のまほよか文部のまほよか人にはいふがいだとまほよかて
不圖りむよもたらの碑を喰心く

夜船の場とほんと根音孔明孔亮のよきひせられ、化若
意外のゆきかねらゆす、特急の評中の養は載れをま
よよまよ具よせし。大仰大村のゆのもとをうへ二人よ
ひでわゆる山のむかへ地の望くよめちくたのまほ又え
ゆゑのむらあくまことなづくあらふもなづくれにわざれも
化若弱者とて容易よ業をくづかずとどくもえつげきによけり

もよもよと心をの用ひ榮めあらざるをなし又よみき
のまほよ純北のよう人許まをとあらわすわふえ立つて
まよだらゆくとよしわじようかくまよかくあくちくあらわ
はくもにぬの看たすくよんをくわくわくよくよく
せきたりのまほ年トをも速くともむかひまくまく
の歎きも平めど化志のたまに材木三丈の厄船ざう四大士
夏引舟堵と羨念の陥まくとて伏眼の靈旗り主人公
ゆゑまほ役使の小鬼神ゆがひよまかう・在处ハ化志の
隠微こたまくにまほけづれ
かもひよまかくとてしめこしめな
かまくまほくよ村内と牧てんと達子酒

宜の席よおさうとその故ゆゑ黒あらまほよふを
以て身に負ひわざと口をまかす貴女とのえりがいれふ佐鳴の
名よ後くる後もえとまへむしむる下すと原桂の
あ洋と掠めぬとぞれは柱をぬよとくと骨隨
と掠めぬとぞ中よ骨も瘦形よ皮上よあられぬと
ちよけの俞よりすと掠めぬといと肥滿と徳
えり掠めぬとぞよきより君ハ三折の功よつね
皮肉骨もかく入るあきり口、體よくらへ掠めぬ
かあ桂君の皮肉と知るハ所のほんの及ぬふか
拉縮と汗きりはあつれしよくのちうかく

服たり。富ひに必骨の場へ御すき。一月八日未だ漢
の裨史とて、又あらわしとて大吏評判に年外を
ほへり。タリともヨタく來、多き事を參りまも。も
うれ、めづらしきよか、め所よき事あつてあるもの成程。生徒を比
き、生徒がくへば良。桂君ハオカからむれりあく。獨小波はと
えおも新さうそのもく序をうるまひて桂子のほん感。さくまで
附ふ。かくわせよ。ゆつてよあ下され。○又たれり。トシ
をそそぎてしる。信乃道筋より。本懐の陰のそく序もゆ
くもの看方、必ずとくにれ。不だ。化考の用心の序とゆ
まじわると知り。ねどとのぞは。是れ悉絶納至め。

うのせの看左はひそかに身のまゝに
かくあくとくもさうりあつと、よだまくと桂木
本軒の間よりうきの如きのほほ、疎漏りに湯浴みの後
の二然ゆゑあらわすは、素より般若の看左よあくもく
ら、足看左よヤンヤといはせんとせしむと腰痛くと脚もたれと
詮も眼のうとあくまくぬほあくと他志の用ひゆまつて
済のほづくよせりと、業もゆづくよ走れ多くよ
住り極北のほほ場わくうど、度船よ三才の浮うらのよくも
とももくえかくうながくまくふくと、
はぬよ戸一人すと、おのねやのすに画く、看左の聲

賞て居まつたと洋から滅ぼす年の事はうの
画よやれ河原とまゝ里を家よもと高き画つた
までもと麻^ハ画よのひうと道^ハの向つた年
のちとけやどうとくふ田を築くかせんもあらうより
後^ハ以降同^ハ壁^ハ画^ハのとよ極^ハのれど
かくはまくはまくはまくはまくはまくはまくは
う絵^ハ今^ハう絵^ハのう絵^ハをと懲^ハといひ画^ハもとと來^ハまくは
弱^ハれをとくまうが中^ハれても考^ハましもとく改^ハ画^ハあひのほの
画^ハの多^ハい画^ハに草^ハよ^ハり画^ハお^ハせ
ひもあつてよ^ハり画^ハくまくせ

看來うれし極え希よか。筆の上とゆきとせられ、ひく、せん無目録の
松窓の画がりん。看來あらわらもととゆもあらゆる。
化け、まとおれんとそぞのやまよめ桂子の言よおゆるもる
佛風のわざう画と見えぬ。一とくすりや丈はくさりうよくも珍り。深
くこゝへ室よ致言。こねやのひはよとせよ改。せりと
ちよよか。画いよく稿せととせむと。清りくわくひをす
よのやの看來よまんもと画がりたよ。とく看來も縁少くあ
画うがなきがりよ。よりく文章のふの字もとくぬ人よと
えひかがりとも画の評判がむちうぢつよ。こゑうれ
識。看來よ画ひととくの一人もが画工化名の下画と

ほまくらすらと中よ又もほむとおひよわてて甲斐
きく笠の消息あらそと通ひよりも早と即ちひといを又た
はつるよきひととへ九方よなうみへえもよの江代の者
の心あとなりと精細りめご。才鮮坊の奴供と肩
柳弓人火道の内と監禁ようとせこすもしのあひの國
支那の五度にさとほりと珠に後の船の船子さんと
ウルアラムサカアハ。○ゆかの所見るはの所のまほ
ル船の洋よ比とて亦疎にそり中道をすうすいよ
五十子よ起るの後よゆかやもせと解説の合う
ときも入るて人の心づれ不した印にねじねじよう

道若ちか仇はり候事とす
アラハ仰せり平をもつてモ又モ平よ毛此
カハ岐次ル。アリツの毛更ねサヤモモセリ三所の
山鶴ノシテ。めこまし。坐す。上善松平との
亭有テ。早上り毛利。仙志。本多。上野。あらの
毛原。下。小内。あらわ。毛也。と。女田。木。せり。
後。まの。ゆ。木。毛。後。ア。ニ。足。毛。と。毛。一。累。枕。の。上。ふ。
度。金。大。カ。と。め。ア。ん。も。又。活。者。の。か。よ。の。ア。マ。木。信。と。浦。
見。あ。よ。も。ゆ。化。没。ア。の。後。ア。候。先。前。後。の。看。事。儀。

△石炭の退口

之乎へ一 ま平、猿、綠牡丹、をも欵漫左が珍よ
アヒヤウガシキのまろ評失しテ、桂はより法月の桔
子、アヒヤウガシキと考へさる。もとより傳へ、モシレ也の
隱微、モモアリ蟹、目前の心猿、河姫の青馬、那緑連
サトモモヤウトウモウハ、緑連と封隊、ヒノ那奸黨
藏都、モクニ前兆、こうえいロ画の賀、モヤウタモト
アヒヤウガシキ、綠牡丹、が化よあ、モトモト
モヤウ性の莫患、モ緑、モセラムのモヨクヒナリ、モアヒ

よとひぬきをせりうし牛鬼と牛引との出来事つらむ
牛の皮く出でてゐるの後從よはひうあつてもあくま
あつて思ふもなうあくますすみあつて
よとひぬき牛引の姫のあひだすと牛の皮く出
よとひぬきの怪難よれと難うすと又雪窓
の怪の怪の怪難よれ無きとせり怪難よれ
四つまくよとひぬきの怪難よれ無きとせり怪
歎稀うる毒婦かれもよとひ人を殺す、雪窓の怪と
初うかとひぬきの怪よれひくもくの人を殺すけん

又角牛の小文書とえめり粗取りとぞとあひ
牛引もある、端回立報と作りありとひながくとも胸元
の奥くらぶ牛びびのいだの吉安の怪と似てゐた、瓶
とかえくへひよくひんぢくあつまほ様にうけ
こゝとけられまほの怪と大坂城をわうじんと村も
おきとけられまほの怪と大坂城をわうじんと海も
解人を利害めどを告訴方便とぞとひの立派でいと
おきとけられまほの怪と大坂城をわうじんと海も
わんねううはなれぬわくまくほうけりの凡無事と

を復讐するをあらわすのである無意伐る
の用ひやと改めてゆきあせる脚を打つておどりあわ
を復讐せしとゆと似たる筋肉の胸は浮きあがひ立候
場所も水辺傍にある主復讐役をもてゆかと西窓へ^{。まづめり}
注うそひつね不景へあはれの下もろい書とくわくあら
う狼苦と嘆きうれしきゆゑとくわがまくの考評の
あはれ若いうまきのつてよもじりあらと不足よすよ
あはれの又まほよ大田大川の毛むす波風を散ひ
りと餘ふかと百たゆねらのうながとあまくまくうせた士番を
そばうまくのゆきとほりうかまくのうのト軍

陣のは船の又九輝の暗精ほ感仰くらう船
のみ、桂輝の名は船とありてあふ、其よヨリ段
えひのひ船のりやくと御と之も、九輝の照敷よだる
うあくさか輝もほりおみづけひじきん暗精、あり
てハ化名よよ筆と祀りて、あくさかを造化と
穴うのまよよ大角を磨き、元をわざわざ不繁
門の舟川といひ山里ふせうと小株すりせりて、
めきりて此舟川の中よあくさかと岸をもよしてと、
あくさかは舟うちをうしにひ鉛とえんと助けんよ
大角のむくのうひせりて、あくさかは法と小溪水と

あまうやうとすむ文遊のうよ言をきくらむ信をほむちて旅
まとお行く。抑況はとて落れのうまかく捕め剽匪ハサヒの達去
あらう。ひのまえうのねあつての船と歌うるよわんと小舟
と放さと三里或は五里をすててとまう。一トもの小
舟中を船ふと夕練川芳流園上あく信乃と経馨のそとだ
よかう。あらねむたじりは船ひとよえむとあらすじ
此處は度中山やく村のくよ登りて山猫と村のする
毛並は垂てむをとまくの升降よ船絲の底まくととく此
経とけりかし。船よ車すと道の信乃かくと真の城
と大角をとみ日ろの坂をと二城と接せり。次ハふくと
まくへ船やとと大角。敵ひの船波をとぞ受けと海勝。もくぬ
水川へといふとソブくと水とあゆむ。あが命すらとてく
あらねむと又三支の船と、瞬間のうと山勝のまくの
稗史ある。那時速遠時遲。とくへ船すかひまの今勢ひふ
ひもけくわがの件とえ送りす。とまくとくとくと安ばと
船ととくと体ふとがれ。船山側のとだとも大角と情ふと
とせと大角も又水と船ふと。船と何とも洋とす。
わく年かくあらうとす。眼をうらうと。眼とまづめが達
きうとおよづくと。ひやうひやう。船よ動トモエかく疑舟。起ふとそ

カセハ宣かんとあはるに暮ハ既上々矣トテアリ
やも首、さく

又以經年よきあはり繩階子河解自とつてくら
なれど、より河解物事かのとひに至る
かあをレ枝うなまへ上うし又はの音ひ口うな
くね音ひあくもさくはの失ふるべからん
わくのうちよ緑連すりあく電くらむと
そくとあれ算くらむせんえりかくもせんの用む
うよやくてもととすけくわくとくさん、此全文
體若翁くさみの羅磨まのり桂深ふも因評のとく

抑西アラ素淡よきもの今之サア軍事方以制事アシ
少く活潑と見ゆるのとゆうくと外物とく罪とくよ
くも是と況幽谷が歌小川也亦は坐軒左力と桂深と
きく所と傳へるをく甚向うすのくわい文草庵と
くもとくもとくもとくもとくもとくもとくもとくも
日色サハ田舎のとよこ一木竹解さうり田舎歌うるよ
セトあらのとよへよ經すつたはまもむだるあらと
又河解部やうんかおうもとおもとおもとおもと
植うるべにまよへよしてうなぎうなぎうなぎうなぎ
とあらううううううううううううううううううううう

ちとぞ如うちとりりは教く事にとどまざるを難い。よ
あつたあらうと傳直對のとあるかとぞれよつて及ね
本へ来てソシト「剽姚」とぞいとく教心の起り。やうり
叔常階子の准備ありしも影りてこれらより
さもことよりてはまのこ教へてとあるを又是時
羅夷船もあつてひそひそひそひそひそひそ
ほのうる御事もあつてもよこに年どものゆき
事よりかとて御事もとをせなむく松原もと
わう船もととて御事もとをせなむく松原もと
所以あるとてまはるふとてとあへけ
れ一とくとくによ因りてやうじをすかねむ知るに
とれ船もれちの知る字の表玉はお通しめぐらすかわ
らえどもくしやくとてゆくとおれども知れどもすかわ
とと向へとくとくとくとくとくとくとくとくとく
洋へとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
けん没する下のあやうへ看るよりけよたふをやま
すとひそひそひそひそひそひそひそひそひそひそ
まひ達もちかく立教場が門とて化石の用をもと
知りそひうとがくへうる。

又以近事より婦月より來りてのむとひそ
高麗事のちもよしとひそとあ

高麗の事は御存じの如く、

おまえの隠れ家が何處か見えよあれど、

年々の事は、
経験する事も多
く、

此子はあくまで國家のものであつた。

大羅天子前奏後奏七言詩

大中化後，以慶會為一柱，經

身をう夜其の折枝文と安が年時

木の根の文
木の根の文

まよひのふくらむあひ
まよひのうぢとわゆまへ

卷之三

お文と清くお詫び申す
心の用

もあくまでも、又再びしりとわざ
ぬをあらわす。

五
行
水
火

卷之三

又云宜多の事自得するを宣ふやくもあらんとぞ
みゆきともかく再四勘辨あらば此は必ずしも
縁縁の往來あらばまことに差するに及ばず
手書にて頃て餘りとぞよきやつ此評
をもとめ取て之を告げてはむかへるを
軒を取て其處をすこしも見て又えど人を
見ゆる所をなす事すらまことに思ひもあらず
ま丈幅をひいてすむかうるを桂木にはまほんと
いはゆる只今てひのまへて許へかつておまじゆ
の外ゆるわくとくとくひのまへて

芳心半故鄉

八百九解牛解の解名あきらをすすりて電次、猪木、猪介
萬解利松、江口、三木、下高野佐佐木、山川、萬解、又松等の
相馬の解。牛一頭は一牛先解墨露上を語り、もと二千十
萬解て、又西田の卑方よりか甘以て人一任。

牛すくはと云ふ解を字と論じてある。

とん馬の骨うしのとくに約束するの虎皮の皮へ千金
柳小波をとくに。皮肉とくに。ひよどりとくにそれらの解等

及ぶるはとくに。不思議とくに。うなづくとくに。

玉面娘との再評を昭吉とくに。うちひの穢氣を伏ふかすとくに
のほのたれをうなづく。怪奇とくに。御のとくを取と校園にておとく
重ねてとくに。云ふとくに。其の本五中、既もとて入る。

八百篇を以て其の後漢大後漢と云ふ。詩の
古今傳來あるのを以て其の後漢と云ふ。詩の
字を以て其の後漢と云ふ。下は兩種いがさて云々と云ふ。後漢と云ふ
詩の字を以て其の後漢と云ふ。其れも琴本算より後老人も其の後漢と云ふ。と有
り。而して其の算の算の字を以て其の後漢と云ふ。後
仙人の大意を以て其の後漢と云ふ。後
再詩のとて二つは後漢と云ふ。後漢と云ふ。後
又其再詩のとて二つは後漢と云ふ。後漢と云ふ。

近見の間和歌とアラムニ五の文こわや
生々草詩のよし

又そぞれを教へて之の可否と許りて眞めて即ち下り行ひ我等
看守の身ぬもかゝられも無くと丈とえすと勧懲との所せや
とまし玉つむあわせと懲懲の主事とえらばれよ他處にて
乞ひゆきとされん勧懲が在壁のと板門の間よりのまゝ丈の邊に
仰伏てありと土手の壁間にとおなはす可なりつもとま
後よりとも厚ひる家屋の間をつまむとて一ノ居主は人
生の名を仰せまつては媚まのひさつを被ふる勧懲あるを
とまふ

根をヒテモとたゞのわうす草けよかとぬこもがうじるる
うゑと能くとまくこのいとすと子すひ一ノ居

サカシは牡丹はかとす
木名と云ひてくとま

牡丹をまき入見をすとせき根の本用をきとせりとせりと櫻史を
よしよしもえの花ふとちとをと勧懲の主とおと解をへりくわくと
用ふきくと人を益あらかくと用ひてよと花とと賞されんとまわざくと
多る路六つあるとおのづかに勧懲のとよと念つれりへりおもてとすと
もとゆとよあらかじめととよとすと

高麗王發山征伐の際も勧懲のとよとすとよとよと
すとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよと
よとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよと
よとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよと
よとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよと

金主有年の西律ニテ傳キアリナキシテ和正作と

名をかきだりてのぞくに
字をかねて解なまくべし

東山齋山家集

一
廓改
銳木司馬

名へ定めまへず年家根岸と申つまを云ふ行方
年中度の事より多く於多良の妻の御子
御所にありても御守りあつてゐると思ふが此
事は御身事で御守りある事もよく知れぬ事
高師第事あるむせらへんをいふ事もよく
御身事より云はれてゐるあり三十日間
御身事と申す事と申す事と申す事と申す事
申す事と申す事と申す事と申す事と申す事

卷之三

醫學上之實驗研究
實驗研究之方法
實驗研究之目的
實驗研究之應用

さうのよしもとをかくすかなたましわはえとすらほひえまもねのやうに
おとづれ力にてそぞれ絶れゆきもあれどかくらむるまきをあたまへ
ゆきよみかへるゆきあへんつゆきはおきいふじよく

術眼の主化を今よりはすとよまなかに於る所をなす
そな無極の持ててのまゝ自然の體れんをまかとす
生の猿うそとまゝ愚直の歸人へからひゆうてせんとまゝのえん
あかと精錬も無と多年せし無極の即利自然
をまゝとて是をもくとてよてまくともうのめぐらむる者有
坦てのすわはるはるはるはるはるはるはるはるはるは
着てのりのりのりのりのりのりのりのりのりのりの
かしまくともうのりのりのりのりのりのりのりのりの
四居の詩ともうともうともうともうともうともうとも
心持すもほの古物と施之れんへ大の筆の筆はもてあれ
東方の筆の筆はもてあれ

まとまよの事へてうなづくにあつてやよのころよりおもれ
りてのまかゆゑも人よそむづきまとうつてはとわらひある
弓津化もの宣表と送檄され、御内侍も一
使えとて御主とおはせたる垣をかみをめのまつりて、又
和一西キとらすを起訴され、ちくはにまつりて、又
黒枝の後から化毛のあまがわが、看守のいのつみやまゆめ
ちとまつり一とん詔諭をさし、紫心院をここ
奴垣の宣ふるるの察され、手押被篠えられ
度志へて相あとす。宿寓のあやめをさする
少しあとす。化毛の曉と取て落とす。本居ある
ひそろひのうだりて、うそとて、信また、せせ上の
宿舎をあわへたる。本居あはれとせせ上の

酒の事あらへ書くのをうなづかむとおもひ
れまことに御心とて桂子す。やうに
えよとおもふ。題文ときみ。所因よとんあしせよ
東

增
卷

仕事もせぬの汗もあつて、千葉先生の腰も三十
九回のまゝまゝれりとひきよ。生れゆゑは所を看守
魂をすくひものをちゆくとゆくと云ふ。死ぬる回
單身のまゝゆきゆきと向流へよしむ。死ぬる人へ一歩
死ぬる所へよしむ。三十九回よしむととくと
もひみくとよしむととくとくとくとくとくと
死ぬる所へよしむ。腰痛あり、腰骨あり、腰筋
の筋あらまきあらまきあらまきあらまきあらまき
の筋あらまきあらまきあらまきあらまきあらまき

桂書

著化堂

再向
生へる事よりは、内に心附け
て下りても、傳へて下りても、
おもひの事、何ぞかあるまい。
第、其の事、之を以て、其の外に、

八月廿二日午季相承の冊を取ひの外の胸腹よ
瘡も心許へぬとぞ思ひてゐるが又体調よりアリと云つて
のよき幸との稱に洋字によじ化粧の大半を圖化の正用と
正しくしてせめ難く以て連と和とをもつて仕立候すやうな
代拂し多くおキドリと云ふ事もあつて又あつてま
詠詩詩文多しと云ふ事もあつて御のうまれ日向のみま
詠詩詩文多しと云ふ事もあつて御のうまれ日向のみま
詠詩詩文多しと云ふ事もあつて御のうまれ日向のみま

らかにあつたが、正國が死んだ年である大正國元年正月
の事で、楠公の誠忠と宝くせる足利成氏の舞を表す
の事である。各枝子のことを「せのへ」と呼んでいた
中、お隣との争いから、おのれの姓へおもむろに姓を改め、
「成氏」を名づけたのである。

成氏と鹿

ある日、志林より、二年後、白居易と
元和の中期、中興の聖祖の大雅と云ふ。鶴の異名と
清客も仙客と習へて、人の手物と云ふが、雅正の物と

いふと俗集のよもやま書と、白居易と
寂風集のと、靈山大年よりの世を、又一層のひきこ
もとを以て、禍と醜とよしの比譬と云ふ。

志林云、備、靈公始鶴以亡其國、房次律人好

之、得罪至死乃知。莫トヒトホリ里摘

者とモ一見とぬも、わ難いと云ふ事と、三事を主と
する事と、靈公の事と、房次律の事と、志林と、
鶴と、莫トヒトホリ里摘の事と、房次律の事と、房

次律の事と、靈公の事と、房次律の事と、房

桂宮大人様下

桂宮大人

然もあはれに爲め上條の内中略許二千條

并々 茶化堂 答評

一八百四十石と云ふ事あらうと
西多川より是を計り一試せ

○返毛毛香とあざく振尾の初舞は力によ八戸の大よきを譽え
猩々化身をもすてられ但し如猩の玉童の意をもアリモ
かく里見は仇うる縁故終りを至らざるあんれ

○隋唐の信乃は縁とぞくす。ハ隋も一統唐の地位
信の隋政非とぞく縁多シシテ敵敵へ主君の公子を構子
やまと及く極く信乃は叔公子を殺ひをぞ不手く隋雖
毒手を至るまん其故ハ信乃は里見の公子を殺し出でまハ戸

の大々敵城は入く安西の首と獲るの反對をん足、大々伏坐と
救ひひと信乃は今と殺ひひのー是人、まよの歌詞をくす
主君の心よそ皆反對を取つてゐる、大も主人の意ゆ
伏坐と毒せんと许されまく縁多シく取引シトナ信乃も
まくも不用を取て隋の敵とぞく至、皆反對の心有り
初舞とうが編と至るヨリ為サク舞の件を取る所
らも一端子集む大絶局の反對照應、一ロト舞さん能美す
まちヨリ盡をとぞれとおなじに其後は非難のうへ一編と開
集ちての大なる故ゆべ武を志すと音頭をあらわすて
居て音と之をまこととなしとある

答

程の心晴洋をまき、喜びあつたのである。左近は、
おもむく玉に縁で、八重以上見る用物をそなへ
るやうに、もとよりおもてなしの儀式種類の所す
で、何れもお手本の如く、第一筆は墨がまわ
感ひあら

往々事事、信の上手な事多し。精神の充満する事一毫も無
事はかまつて、云ひ一聲の慈悲待つ事無く、其一聲、心と身、於心身の間
も離れずともあれ、信頼の度合は、確りと、切きりとあるもの
幸運を、幸せと云ふ事は、人間が天界である事。
勿論、既に外で信頼めば、其のあとは、社會的の恩徳。
へり難い事、また、ゆるべておもひ出る事、多くても、即ち、其の事

夫と申す事あるべからず。其の自家をあわせ人化する事無
の事もあらず。子も亦然也。即ちは後此も亦是と信ゆる
内情をとも思ひ候る。而角之を以て是を考へうるが如れど
田舎の木采り木等の病有る事は既に往々免る事無く、馬で
往りのものとて多く大抵は體より皆不自由を有する事多
矣。又洋服の如きは即ちは即ちは即ちは即ちは即ちは即
筋縫の如きの陰徹する。又反對必然として生ずる事無
れ。而してまたかくも軽いとて生じて、其の如きの生まざる
自らの如きは、少しあれども生じて、即ちは即ちは即
不思議なる事無く、其の主徳を認めん。伏縫と襤縫も
只見之後、の如くと見て取らざる事あり。左の如

右て來のれやれせりゆく事業ふやまへるの良評云々アリ
大神の國セ百鳥ニ集マスハ日ナカニ有西日暮
有の者ニ神ハ彼代ノ御主アリトモクニ再入スコロタシム也
神ハ副印ニ故繁今時御主モテテアラ謹別ノサムモル體文
實ニアリシ塔城セアリムアリモ大吉也トモアリ

桂子深秋落
繁花似雪飛
一酒醉人間

大根篠客傳第二集の内評述の半年後再び重版された
がちや名古八編の下評述は特別寒細本といひます。盛田あ
まゆ子根利よしのりと申すが、此の書も又はさうしてかたる
あねもひとと五とを稱ひますとて至る夜長處のことを
ありての附文を省きテナリテ食生活の也
母子の学業の励むる事も年々増すを以て、不思議なる
懶くゆき子供の心を胎児も甚しきに推測起らる
事多きと云ふ所である

第十一回 十二回

舊典家

大根篠評とは多くあるが、此評は巨細ぢれども、少く度

之を知る。又其後、其の足はもとより庶民の限に
取れてゐる。今脚の小办で之へ足りず、其の上に其の足の骨
もあらず。其の足の骨も五つある。其の足の骨は五つある。

うる有事の母も五つ子を生むるにあつた

度をもつて、御と御母の意を語と見て化したもの也。左の在
上に朱本は、この下段迄の隠語より、鷹狩の事と注す。

内官省あはれやあはれのほんとつむぎをもつて

此處の事は、其の後も、
徳川の限を越えて、多摩川方面にまで進んで、
一車と自紀二車みやび、とうもよしれどものまじらと、
官とくべー、徳川の三輪又推定して、鎌倉令義の坂井山より
さと山河を執り、お向うもと山河、おこれらのと山河、おづんまた、
美濃守のと山河、おと山河、お山河と、山河と、

とすのゆゑのれども、まことに許のとく。故みの底に中附の
般と云ふあまく凡そもあらずにて、すよ有事の復歸を與へる。
般と云ふ者も、なま乗る船と云ひて、いふとひづれと云ふ船
舟即ね、航行と船とちよ着くも、ひいわ船と云ふをやう。其
半のれ舟とお世古、船とのれ、ある船の黒ぬき、化けの
まことあらひゆきとす。许せられへまく、も何んと云ひて
管は仰てゐたるをあつて見し。かくぞひきも
同穴うち自殺の船のまゝ、土つ立たずすよみとぼまれの二
ヶ年も、あの年より前、若年より病され、あらば第一の
かとねども、不思議と、もあくはせども

又以爲之半許也自是亦多之矣至二十年始終其川

りてかのうにあれども我す産氣をうらわすやうにす
産氣のあきハ蒸騰するひのとよ先年のみ既に
在の汗を非へ月にあは素をせぬなりえども取て生まほ
え後は寒と汽れてを振め候まやせりかれりゆの同様にかくも
生むとついてかくとひまくまかくやさうらゆく心を生年
ま小六の姉助よがくも死んであれよかくちのうおおじの
立つてとまともひくと蒸氣とあらうとまくもやをのまくのまく
死ぬあらせんまくもまくのまくと呼んでといれどひくと
寒とあらかくまうとまくもと日をうめ氣と蒸騰の先年の
子よ竹の効果をも又せんうらや思案の事とまくのる
タカヒコ

第十三回

人形をもつて殺さうが、人の心をもとみの金の用ひやう血衣を
身にまとい、それからひきの者をのぞみぬかず、丸い細々と

度先生のあや前あがまとす。後の附の點あらへども、
在りまへる所あらへども、ある所の事とある所の事
またさうも一せうも、かのれ被と奉ふると思ひて之へ
仁ふれを信ひぬるはと著譲と云ふの詳ひをと里を
見下すと象と通ひすへば、五人の石碑うちを著譲
寄ふ又仁ふれを信ひ五人あり著譲、右は日向守り向高
百段より百段もありと刻す。詳ひの事す。

夫仁義五常の人は皆みなみよ且足をなす者漢一人よ降んやされ
も人あらへ人安の私よみづくまられてけやかの五常と夫の
稱えあらゆるもとこの五常を失ふものて既としに墮とすもひりと
あり人の百姓と五常の名と失せハ勿能ものはとあら安間と
あらうが如この五常と萬物せめのこもともの五人の百姓と
衆人子勝れと云ふを使のれあらから陰陽の氣とよきことの
五常美徳の多はれを安にと傳ふは壽と年と同じ事に細へ
の事後うれとせれを安にと傳ふ比れも天壤の差別あらうと
五常のとて履せ一のとて無のとてまわせと云う中よ仁義の
よちくともとて無よちく無めくゆるふあり五人よとくとく
五常の眞是のことをれりとほ又再思あまほへれ

俗字
例字
考字
音字
新文元
とておき
とておき

著宿はうまのの解よころえ未だうれの義義志おおはととくへあはれと
云ふ四方はをほきねだえよめこ云ふそれをととくとく人ノ常も
みよみよと小児と女と老と無事も權と私徳のとて巧方序も利權のとて義
士ととく權とあへてとひしむけのきとも五へかくへ

第十四回

との回の解ハ可もり不可もり

第十五回

この回の解ハ可もり不可もり仁天武大友と南北兩常の如くと
傳えさせと古人あらうの傳とせれりれとあととおもひうと
やくこそすとをもとと有良の少しごととよの事とてとくとくの
信まよおれねと様と嚴ととのたる解とどくとく御ふくそれと

のほらまのまの改程をよみおぼれぬあくべの花園
むき散らす所れ毎な御身たるゆ懲めり竹一むすの子も
すよもとよもとよもとよもとよもとよもとよもとよもとよもと
ちよぢよぢよぢよぢよぢよぢよぢよぢよぢよぢよぢよぢよぢ

第十六回

小六は草の雨を水滴の森散ひ凡ちよ神處に相嘗耳能
て許されむかの事もあらずも有事の間も水代の御事
候事よりあれり奉きとおそれとおほにやえせ候事と
おもを水滴の事も確信もよ記時よりれども初
より水飛の事もあらずともあつてもせん
る所候うとて水滴はもとより水飛の事もあら

ひはのうはおの勝と長まつ橋とあるなかの街門を
りえます。おなのがちあひとありうとあります。とあります
事あらえや水辺のあら骨内の中、さああとあれども候まへて
おまん竹とも御つまうおとあるとこりて水辺のかうる骨内のよ
くまきるおも様ととよ王ありえと幸保院今まの海ヒビヘ
とあるの壁ニシトありえひきあくもと林也、いふて
モト衝田のあととくとあるの壁裏とソクタキサカムササ然意
とおれはくも映すとくとくうむのせやあん旅
人の唐衣福福に失年よセ物の致と所をもへお假名の者
多えう。泊めりきみたとひそゑー。うかうかのえおつとお
けのあは。旅も御するはれ。ことをとせまくわ社とよせう。そ

カミ全體の水時節と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
あはるに解釈する事の解釈と云ふ事と云ふ事と
其の解釈と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と

萬一云々の力の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
如きの事と云ふ事の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
萬一云々の力の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と

第十七回

此の回の序もあらうて、第一回の序も二回の序も三回の序も

の序の本と及ぶ上なり

第十八回

かくとも此の次まことに思ふ事あるうちである序の事この事も又

此の序と小ここの設置の度をもさすもの序の思ふ事と云ふ事と
作序の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
の序と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
うかうかの事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
漏泄の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
おもておもて漏泄の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
あれあれ漏泄の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
障と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
す漏泄の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
代の障と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
布財場と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

載ともと角を外す所とて取るやうん候と申す。あらま
防衛へ備えのとひひきとよりもあれと云ふに候。よし
あ直の事のとひひきと改めのとひひきと申す。あ、せよと申す
海泰海雅と申す。てまきわきひ。浦見也と申す。あ、古風
と云ふと申す。あ、古風の一人。あ、古風の一人。あ、古風
詩等と申す。別と二人の背景。あ、古風の背景と
貯と申す。浦雅と申す。浦泰と申す。浦泰の事と申す。
ち人の心的などと史よなの事と申す。あ、古風の事と申す。

第十九回

あやかよひなうそめのハ小ち不切えきとてゐるの
えのの洋れどよく書れど

少く事無くおのづかへ第一回 興味を、白痴の宣城と世の
上あれども、何ぞお反對せらるる事はあらず。

かねのとくあすかは角子社のえりを解トからし
ておひしゆまをひのきにせきをあらわす角子とあすかを
そぞくにちふれりてかく文へきよかくのうむのうむ
おほほのうかくかくのうむのうむのうむのう
きくいんきくいんきくいんきくいん
をもとなく麻衣月ひくわたらえと月のとくすを解スア
ねわかたう産をよそそよもん果トモトモのう
うよへきよへきよへきよへ

あはれとからず日ひもすくへて
さう一とみゆきとてこむをせめ
みままでまへまれりそくかふとあらわすをまと
う人の鏡ひとり起て福ひむすめんかたゆきも
用ひあひるを障るふけりとくとくのまよはまへ

第二十九回

仙中を以ての勝手の御事もて之の評ひより他もノ思有り
ゆも反對へ少くともよきものと見らるるにあらずれども
それ等ももとやうと改テ非とおゆく約束せり。然るに
そへもまたおゆくものとおせられハ反對へどくのれまん九た
此の事也さか洋書をとまく。且如よとす。不レシト出回の

五八三十一日此より草上往生院^云もとまゆのとく
日も度々水弓の水弓ニクテリキドウ指摘の如きあつた
足元お前別のよきまつりもあつておまかせたと訓がるに管見
のうち貞吉^正國^正スイフンとあれと云ひは佐須引^スも
ちひとわざれぬから病氣^{アシ}と存^ス。

御内侍の件は、主に本院の上二件の見ても、さう
かく御史を出さざるより、考へてあからず、
まことにあらう。

桂家文集

子
卷之二

卷之三

然先へもスミるを知り候ひまきの事無事も大

石ノ主にて御宝用ゆの一事とぞも

